

この指とまれ この指とまれ この指とまれ この指とまれ

### 「ほくの宝物だよ!」 —新しいタイプの交流で得た宝物—

「先生、今日の交流のとき、お姉さんたちは来ますか?」交流の活動の前に毎回、I君は尋ねてきます。「インターネットを使ったビデオ通話での交流」だということ

を十分理解しているI君ですが、会いたい、話したいという気持ちが回を重ねるごとに強くなってきているのです。この交流の一番の成果は、このように「多様なコミュニケーションの形態に触れる」ことから、「いろいろな人と触れあい、相手のことを思う」ことへとねらいが変化してきたことです。

夏休みに、坂戸高校の生徒さんたちを久里浜に迎えて、お昼ご飯作り、会食をメインの活動にした交流を行いました。この、一緒に何かを作ることから、互いの距離感は縮まり、その後のスクリーン越しの交流でも、スクリーンの向こうにいる人との交流ができるようになったと考えます。ビデオ通話という新しいタイプの交流は、直接会うために必要な情報をそろえ、直接会った後の「また会いたい」「もっとお話したい。」という気持ちにこたえる役割を果たしました。

「交流の後、もらったプレゼント(クリスマスカードや交流で使う道具が事前に送られてきます。)など、親にも見せず、自分の部屋に飾って、宝物だと言って

附属久里浜特別支援学校 教諭 小山浩平  
小学部6年I君とお母さん

います。お願いしないと見せてもらえないんですよ。」1月の交流を前に、I君のお母さんからお聞きした微笑ましいエピソードです。お互いに卒業を迎える子ども



たち・生徒たち、ビデオ通話での交流は最後になりますが、これから先、どうつながっていくのか、どんな宝物を増やしていくのか、楽しみです。



### 教員になり2年目、日々勉強です

附属大塚特別支援学校 教諭 本間貴子



2008年4月に筑波大学附属大塚特別支援学校の教員になるまで私は、長い間大学院で知的障害教育を学んでいました。大塚特別支援学校が教員として働く初めての学校でした。大塚特別支援学校にきてからもうすぐ2年がたちます。ようやく学校にも慣れてきましたが、学生時代とは比較にならないほどの緊張感を毎日もって生活しています。日々試行錯誤する毎日です。

昨年度は高等部1年生、今年度は高等部2年生を担



当しています。この2年を振り返ると、周囲の先生方に本当に助けてもらい勉強させていただいた日々でした。高等部は生徒にとって社会への出口にあたるため、生徒の卒業後の生活を考えた授業づくりが大切だと教えていただきました。卒業後の生活に熟知していることが前提です。しかしこれまで大学時代のボランティア活動や施設で働く友人の話や書物の上でしか卒業後の生活がどんなものなのか知る機会がなかった私にとって、卒業後の生活がわかっているとはいえませんでした。幸い大塚特別支援学校には長い歴史があり、親の会である桐親会や青年学級、作業所の工房わがざりもあります。大塚を卒業した生徒の方々が卒業後どのような生活をしているのか間近で見ることができ、大変勉強になっています。

今後の目標としては、やはり授業力をつけられるよう努力していきたいと思っています。先輩の先生方に少しでも近づけるよう精進していきたいです。

### 附属高等学校

附属高等学校 副校長 鎌倉芳信

附属高校には運動関連の伝統行事がたくさんある。歴史のある独自の対抗戦をもっている運動部も多い。その中で学習院との総合定期戦、サッカー部の湘南戦、ボート部の開成レースは、学校行事として位置づけられてきた対抗戦だ。殊に、私たちが「院戦」と呼ぶ(学習院側は「附属戦」と呼ぶ)学習院との総合定期戦は、規模と盛り上がり、試合に懸ける両校の生徒の思い入れという、いずれの点でも最大の伝統行事と言える。三島由紀夫の文章にも学習院側から見た院戦の一場面があるほどだ。



その院戦について紹介する。この総合定期戦は、附属高校と学習院男子・女子高等科二校の間ですべての運動部が対抗試合を行う。そして、その勝ち負けの総合数によって優勝を決めるもの。毎年6月初旬の土曜日に開催され、会場は三校の持ち回り。附属高校が会場になると、学習院側と比べて校舎の古さが見劣りするのには残念だ。が、部員数の上でかなり上回る学習院相手に、附属高校は各部とも毎年果敢な戦いを繰り広げる。この30年で7勝20敗3分の戦績。しかし、見どころは試合そのものばかりではない。開会式、閉会式および各試合の頭で行われる両校応援団の整然としたエール交換、また、学習院女子と附属ダンス部双方による華麗なチアリーディング、さらに、両校で組織された生徒実行委員会の見事な定期戦の運営ぶりなどである。

当日は両校の大勢の保護者や卒業生がそれぞれ関係する試合の応援に駆けつけ、たいへんな盛り上がりとなる。その院戦が、今年2010年で第60回を迎える。60回という記念すべき区切りの総合定期戦。ここでどんなドラマが展開されるか、両校のこの戦いに懸ける思いがどう発露するか楽しみなどところである。



附属の今

### 附属の新しい波

～普通附属と特別支援の連携の試み～

附属学校教育局 教授 小林 汎

「附属学校の教員が、同じ大学の附属学校を知らない」と聞くと不思議に感じるかもしれませんが、それが普通の世界として通用していました。

筑波大学には9か所に11の附属学校(附属駒場中高を一つに数えると10校)があり、約530名の教員が勤務していますが、はたして全部の附属学校名と場所が分かっている教員が何人いるのでしょうか。ましてや、全部の学校を訪問したことがある人は数えるほどしかいないのでは、そんな実情があります。その原因は、一都三県に分散して地理的に離れていること、附属間での人事交流がほとんど行われなために他附属を経験していないこと、全附属の教職員が参加する機会(イベント)が少ない等々が原因でしょう。そのことが、附属学校の将来構想を考える場合にも、普通附属(5校)と特別支援(5校)の両方を視野に入れて考えられることが少ない一因になっていると感じていました。

2009年1月に「普通附属と特別支援の連携検討会」を立ち上げて、いくつかの試みを始めました。①普通附属学校と特別支援学校との児童・生徒の交流実践を共有化し発展させること、②お互いの学校現場を実際に見ること、③両者の協力で、一つの共同研究を行うことの三つです。

①は、既に実践されているものを整理するだけでも個別には色々と試みられていることが分かりました。また、会合の中で出たアイデアが基となって実現したのものや、学校のカリキュラムの一環として取り組んでいるものが発展して、生徒が夏休みに泊り込みで交流したもので、様々な取り組みが始まりました。情報を共有し、先生同士がお互いに「顔の見える関係」となり協力し合うことの重要性を強く感じました。

②は、附属小学校訪問(10月20日:参加者15名)、附属坂戸高校訪問(12月15日:参加者14名)そして、第3回目は2月23日に附属駒場中高訪問を予定しています。参加された先生の多くは初めての経験で、他校の児童生徒の様子や授業の実際が分かって良かったと感じていたようです。

③は、視覚特別支援学校からの提案で始めたものですが、視覚障害の子どもたちによりよい教科書の提供を目指して、教科書編集者も交えて「点字教科書の検討会」を始めています。

筑波大学の附属学校において特別支援教育を進める鍵は、こうした取り組みを地道に続けることと感じた1年余の取り組みでした。

